GRL NEWS
Gender Research Library
Nagoya University

名古屋大学
ジェンダー・リサーチ・ライブラリ

No.12

2024年1月発行

ジェンダー関連アーカイブの新コレクション紹介（女性労働資料）

（名古屋大学ジェンダーダイバーシティセンター教授）
林葉子

GRLには、ジェンダーに関する学術書の他に、東海ジェンダー研究所から寄贈された貴重なアーカイブが複数あります。名古屋の共同保育所関連資料や、大脇雅子資料（国際婦人年あいちの会資料、男女雇用機会均等法関連資料、日本女性会議なごや関連資料）、「ワーキング・ウーマン（男女差別をなくす愛知連絡会）」関連資料、愛知県私立学校教職員組合連合資料、「愛知婦人（女性）研究者の会」資料などです。その他に、坂本清泉・坂本智恵子『近代女子教育の成立と女紅場』（あゆみ出版、1983年）の執筆に際して収集された女紅場関連資料などがあります。

2022年末、それらのアーカイブに、女性労働協会から引き継いだ女性労働関連資料が新たに加わりました。それは、かつて厚生労働省の「女性と仕事の未来館」が建設された時に、展示のためにと集められた資料の一部です。「女性と仕事の未来館」は残念ながら2011年に閉館となり、現在、「行政デジタルアーカイブ」にてネット上で画像を見ることができるものもありますが、資料の現物の一部を、女性労働協会を介してGRLが引き継ぎました。

それらの資料の多くは、戦後の労働省婦人少年局関連のものです。婦人少年局パンフレット27点、婦人少年局リーフレット47点、ポスター140点、婦人少年局壁新聞13枚、紙芝居2冊、婦人少年局報告書16点などがあります。その他に『働く母の会ニュース』（1955～2006年）や、「新案明治婦人双六」（明治38年、明治43年）、「買い物双六」（大正3年）、明治期の女性の産婆試験合格証書や看護婦免許状なども寄贈されました。現在、GRLではこれらの資料の整理を進めており、作業が完了し次第、閲覧に供する予定です。

これらのコレクションを手に取って眺めていると、女性の暮らしを良くしたいという当時の人々の熱意が、ひしひしと伝わってきます。女性が参政権を得たばかりの時期に発行された労働省婦人少年局の資料では、しばしば、女性たちに対して、自分の意見を表明して議論を的確に進めていくための方法が、事細かに指南されています。そのことは逆に、女性の政治参加が許されなかった時代には、いかに女性たちの口が塞がれ、その結果、女性たちが、いかに議論に不慣れになってしまっていたかを示していると言えるでしょう。言論の自由は女性解放の要であることが、あらためて実感される資料です。

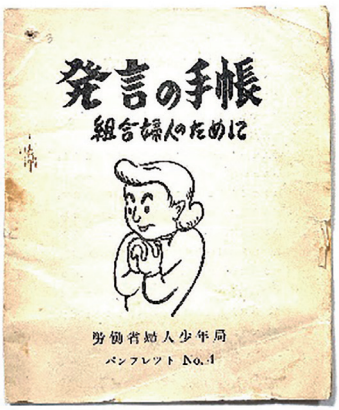

図1
労働省婦人少年局パンフレット No.4『発言の手帳　組合婦人のために』（1949年）、No.5『さあ討論しましょう』（1949年）。

図2
「発言することが会議に参加することです」労働省婦人少年局パンフレットNo.4『発言の手帳』12頁。

地域社会における図書館と女性の学び
―イギリス・ロンドンの図書館から

（教育発達科学研究科准教授）
河野明日香

「地域社会における学びの場にはどんな場所があるか」と聞かれたら、私たちはどう答えるだろうか。子どもたちにとっては、学校や塾、地域の子ども組織の活動などが主な学びの場となるだろうし、高齢者からは公民館や地域の高齢者同士の集まり、といった答えが出てくるかもしれない。では、成人女性にとって地域社会における学びの場とは何か。社会・生涯教育学を専門とする筆者の「癖」なのかもしれないが、さまざまなコミュニティ施設や市民の活動の場などとともに、いつも図書館を思い浮かべてしまう。ここでは筆者の「癖」に基づき、イギリスの図書館と女性の学びについて考えてみたい。

新型コロナウイルス感染症の扱いが変わって、数年ぶりにイギリスを訪問した。現地で訪れた場所の1つにロンドンのタワー・ハムレッツ区のアイデアストアがある。アイデアストアとは、生涯学習センターなどを兼ね備えた複合的な図書館であり、現在5館が開設されている。タワー・ハムレッツ区では、貧困や移民の増加による共生などが深刻な地域課題であり、アイデアストアはこれまで利用率が低かった図書館を刷新し、図書館を通じて住民を社会に包摂するために建てられた。

アイデアストアの1つであるアイデアストアホワイトチャペルの館内に入ると、開架書庫が並ぶよく知る図書館の姿が現れる。そのなかで特徴的であるのが、地域住民に即したベンガル語などの図書が数多く取り揃えられている点である。また、館内のボードには、子どもや成人向けのさまざまな講座の案内が掲示されていた。訪問した日は、本を読む人は多くはなかったが、そのなかで学習室に数人の女性が集まり、スマートフォンを片手にノートを広げ、学習する姿があった。講座に参加するというよりも、知人と集まり自主的に学んでいるようであった。アイデアストアでの女性たちの様子に、図書館は私たちの知る権利を保障するとともに、学習権を保障する施設であると改めて考えさせられた。アイデアストアが存在する地域は社会的排除に直面する住民も少なからず居住する地域といえる。ときにはそういった社会課題をいかに克服していくか、地域をどう創造していくかが図書館の活動主題となることもあるだろう。図書館は地域づくりに根差すといわれる所以である。アイデアストアでの女性の学びは、図書館の意義とその可能性を教えてくれるものであった。

写真1　アイデアストアホワイトチャペル

写真2　アイデアストアホワイトチャペルの学習室

オープンキャンパスGRL企画
『これがハカセ夫婦の生きる道』開催報告

（名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ司書）
坂川万理子

2023年8月8日、名古屋大学でオープンキャンパスが開催され、『これがハカセ夫婦の生きる道』と題した研究者のトークとGRL（ジェンダー・リサーチ・ライブラリ）の本を紹介をする企画を行いました。

この企画はGRLをもっと広く知ってほしいという私共の思いに共感し、学術研究・産学官連携推進本部のURAの丸山さんが一緒に何かできないかとご提案くださり、研究者トークは夫婦とも研究者でキャリアと子育てを両立している宮武広直先生と南崎梓先生ご夫妻に引き受けていただくことで実現されました。

宮武広直先生は名古屋大学素粒子宇宙起源研究所で観測的宇宙論の研究をしながら、子育てをしているイクメンです。そして南崎梓先生は名古屋大学国際広報室副室長としてキャリアを積みながら子育て奮闘中の方です。お二人に話をしていただくことで若い研究者や学生たちが自分の人生について、ジェンダーについて考えるきっかけとなれば…そんな思いでした。

内容はハカセの生きる道<夫編>とハカセの生きる道<妻編>とGRLの蔵書紹介の3部構成で、ドリンク片手に和気あいあいと発表者と参加者が触れ合う形にするため、会場はライブラリ内ではなく建物内にあるカフェブランで開催しました。

ハカセの生きる道<夫編>では宮武先生より天体望遠鏡の観測データを解析し宇宙の誕生と成長を説明する物理法則を探し出す研究をしていること、そして国際的なプロジェクトに関係している都合から海外出張も多い中でも1歳半の息子さんの子育ても全力で関わろうと奮闘していること等、具体的なエピソードをご紹介頂きました。

ハカセの生きる道<妻編>では現在では広報パーソンとして活躍されている南崎梓先生にパートナーとの生活を第一と考え、夫と共に渡米し、そこで新たなキャリアを積んだこと等を話していただきました。柔軟な生き方と弾けるような笑顔が素敵な方で、これから子育てとキャリアの両立を目指す若い研究者や学生たちが熱心に耳を傾けていました。

最後にGRLの蔵書紹介を行いました。

今回の企画の参加者に興味を持ってもらえるように、キャリアアップやワーク・ファミリー・バランス、理系女子、ジェンダー・フェミニズム等に関連するGRLの蔵書10冊を紹介させて頂きました。

GRLでは今回の企画だけではなくジェンダーを広く知って学びを深めていただくため、様々な図書や資料を揃え展示や企画等もおこなっておりますので、皆様ぜひ足をお運びください。

DENとしての図書館

（名古屋大学ジェンダーダイバーシティセンター特任助教）
町田奈緒士

「自身の研究と図書館のつながり」というテーマで寄稿文の依頼を受けたとき、私の脳裏に直観的に浮かんだのは、「DEN（デン）」という言葉でした。DENは、かつて環境心理学の講義で学んだ建築用語で、原義は「巣穴」であり、転じて隠れ家や小部屋を指す際に使用されるようになったようです。講義の中では、教室空間の中で息が詰まった時や、一人になりたい時にぶらりと立ち寄れる空間として紹介されていました。

なお、ここで、図書館と「研究」というテーマからは少し逸れるかもしれないことをあらかじめお断りしておきたいと思います。というのも、私の研究上の図書館の利用方法は、文献渉猟を主とする学問領域とは異なり、恥ずかしながら、理論的考察や事例の意味を読み解くために文献を参照する必要が生じた時、しかも丸一冊全て読み切るよりも、必要な箇所を読むという「つまみぐい」的利用法です。そのため、研究活動に絞ってというよりも、私という主体がどのように図書館と関係しているのかについて語ることを出発点としながら、図書館の果たしうる機能や意味について考えてみたいと思います。

では、どのように図書館と私は関わってきたのでしょうか。素朴に考えると、私にとって図書館は、少し疲れたり、一人になりたい気持ちになった時、隅の方の席に座って本を読んだり外の景色をぼーっと眺めたりすることを許容してくれる場でした。また、特に学生時代には、執筆作業に集中したい折には決まって図書館で作業をしました。このように身体的な快復を図るとともに、思索や執筆活動に自らを焦点付けたい時、図書館は私の隠れ家となっていました。

加えて、図書館は、日常世界とは異なる外部的なもの（「他者」）との出会いを提供してくれる場でもあるように思います。最近読んだ『あなたがたに話す私はモンスター』の一節において、哲学者でトランスジェンダー当事者でもある著者のプレシアドが、社会的な付き合いを苦手としながらも生き延びられたのは、書物のおかげだと述べていました。プレシアドにとっては、本こそが、性別の二元体制を脱構築する言語活動を学術的に習得することを可能にしたのだそうです。プレシアドのように周縁化される属性を持つ人々が日常世界に上手く棲まえていないときには特に、異なる言語体系が導入されることによって息が吸いやすくなることがあります。図書館での書物という自らの日常の外部にあるものを提供してくれる「他者」との出会いは、ある種の「こころの処方箋」たりうると言っても過言ではないでしょう。

ここまでどちらかというと、本人の主観的体験としては「他者」と出会ってはいるものの、物理的には一人で利用する際の図書館について述べてきました。しかし、GRLをはじめとし、図書館は、実際の現実的他者とも出会う場としても機能しています。ここGRLでは研究員や院生スタッフを雇用する制度があり、これまでにジェンダー研究を蝶番として、社会学・歴史学・映像学など多様な学問領域の方々が研究員や院生スタッフとなり、彼らとの出会いは、私自身の思考や感性、興味の幅を拡張させてくれています。

主体にとって「他者」と出会い、心身の快復ができ、新たな自己生成に繋がるような出会いがもたらされる場、換言すれば、日常世界から少しはみ出たDENたりうる場が図書館と言えるのではないでしょうか。

引用文献
ポール・B.プレシアド・藤本 一勇（訳）（2022）『あなたがたに話す私はモンスター：精神分析アカデミーへの報告』法政大学出版局.

GRLスタッフとして得たこと

（名古屋大学教育発達科学研究科博士後期課程）
森川華帆

GRLスタッフを始めて 2年余りの月日が経ちました。もとよりジェンダーには関心があり当図書室に足を運ぶ機会もあったのですが、スタッフとして過ごすことで得られたものは多く、スタッフになって良かったと思っています。

第一に、私はこれまで図書室を利用することはあっても蔵書検索は手探り状態、誰にどの程度の質問ができるのかも分からなくて訊けずじまい、”あと一歩”の利用者でした。しかしスタッフとして日々本に触れ、書架整理をし、時にはレファレンスをして、図書室という施設自体への理解が深まりました。

第二に、ジェンダー学と心の距離の近接も大きな成果のひとつです。スタッフとして、また、いち利用者として本を読む量が増えたこと、さらにはGRL掲載の図書ポスター作成やブックトークにおける図書紹介を通して自分の頭の中を整理することで、私のジェンダーに対する理解はより深まりました。読書はそれだけで十分知識の獲得に繋がりますが、やはり通暁に大切なのはアウトプットなのだと感じます。

第三に、社会心理学専攻の私は普段どうしても科学的な視点に立つ図書ばかりに目がいってしまうのですが、ほかのスタッフのポスターを見たりブックトークで話を聞いたりすることで視界が広がったように思います。これはGRLが開催するセミナー等にも当てはまりますが、普段足を踏み入れない領域からジェンダーについて考える機会はとても貴重なものです。

最後に、他のスタッフとの会話にも収穫があると感じています。他愛もない会話の中からもオールジェンダートイレなど身近なジェンダーに関する意見交換や、研究領域を越えての語らい等を通して多様な考えを取り入れることができます。このような刺激は、スタッフ間の業務記録のコメント欄からも享受できるため、シフトの被っていない人の意見も興味深く読んでいます。

ぜひ利用者の方にもGRLの魅力を知ってもらい、スタッフとの会話や企画参加からジェンダーに関する関心を深めていただけたらと思います。

GRLの「いま」

当館は、ジェンダー研究を推進するためにフェミニズム、ジェンダー、女性や性的マイノリティを取り巻く歴史・社会・理論などに関する図書資料をそろえた専門図書館であると同時に、広く市民に開かれた図書館です。今回はジェンダーに関する社会課題をよりわかりやすくお伝えするための活動をご紹介します。

扉を開けて正面に見えるガラスケースでは、徐玉GRL研究員による企画展示「メディアにみる女同士の絆」が展開されています。ケース横に国立女性教育会館（NWEC）からお借りした関連図書50冊を配架し、展示内容に関心を持たれた方や理解を深めたい方がすぐに手に取れるようにしています。貸出もしております。（写真①）

入口横の展示窓では、月毎にジェンダーに関するキャンペーンや記念日等のポスターおよび関連図書を紹介しています。国際女性デー（3/8）、多様な性にYESの日（5/17）、男女共同参画週間（6/23-29）、女性大臣の日（7/19）、オランプ・ドゥ・グージュの「女性と女性市民の権利宣言」（9月）、女性に対する暴力をなくす運動（11/12-25）等を取り上げました。（写真②）現代社会において改善が求められるジェンダー課題の背景にある歴史的経緯や社会構造を紐解き、女性たちの思いを身近に考えるきっかけにしてみてはいかがでしょうか。

当館では毎年200冊以上の図書が新たに加えられます。一冊の本について詳しい内容を紹介したポスターやおすすめポイントを一言にまとめたPOPを大学院生スタッフが作成しています。（写真③④）色鮮やかでわかりやすい説明は人目を引くばかりではなく、来館者の皆様のジェンダーについての潜在的な関心に訴えかけ、より深い理解へとつなげてくれます。今後ともどうぞGRLをご活用ください。

（GRL司書　堀川香織）

ご寄附のお願い

GRLは、ジェンダーに関する研究、教育、研究者の育成、ならびに男女平等意識の啓発、普及に向けて、フェミニズム、ジェンダー研究に関わる図書、雑誌、リーフレットやパンフレットなど、多様な文献、史・資料を蒐集・保存するとともに、研究者はじめ学生、市民など多くの方々に利用いただくことで、ジェンダー研究を実践的に発展させていくことをめざしています。

GRLのようなジェンダーをテーマとした研究活動施設は全国的にも珍しく、その個性的でユニークなありかたは、21世紀の知のパラダイム・チェンジに貢献しうる大きな可能性を有しています。GRLがジェンダー研究を深化させ、その成果を社会に還元できる知の拠点へと成長していくためには、文献、史資料を散逸させることなく、蒐集、保存、整理し、広く提供できるライブラリ、アーカイブの存在が不可欠です。

GRLが、先人たちの知の営みを次代に継承していけるよう、みなさまのご支援を賜りたく、お願い申し上げます。ご寄附金等をいただける場合には、こちらのメール（grl@adm.nagoya-u.ac.jp）までお知らせ下さい。

お問い合わせ：grl@adm.nagoya-u.ac.jp
電話：052-789-5111（代表）
アクセス：〒464-8601 名古屋市千種区不老町
地下鉄名城線「名古屋大学駅」1番出口より徒歩1分

GRL 名古屋大学ジェンダー・リサーチ・ライブラリ
Gender Research Library Nagoya University